

# 鳥取県西部地震を体験して

## —その復興と教訓—

### —平成 13 年度防災安全中央研修会講演録(その 2)—

鳥取県知事 片山善博

皆さん、こんにちは。今日は皆さん方の研修の場に私にこうして話をさせていただく機会を与えていただきましたことを、主催者の皆さんと話を聞いていただける皆さんにまず御礼を申し上げたいと思います。

個人的なことになりますが、今日の主催者の財団法人には前身があり、昭和 52 年にその前身である(財)消防科学情報研究センターという名前で、それがその後別の法人と合併して今の財団法人になられていますが、前身を作る時に私もその財団法人の設立に関与いたしました。名前も自分で考えた名前でありまして、今回こういう研修の機会にお話することができることは個人的にも大変感慨深いものがございます。

今日はお手元のテキストの中に若干のレジュメを用意しています。鳥取県西部地震を体験してということですが、ご承知いただいているように昨年の 10 月 6 日に鳥取県は大変大きな地震に見舞われました。約 1 年前のことです。

振り返ると、当日ちょうど今頃ですが、10 月 6 日午後 1 時 30 分に発生をしました。私は当時県庁の中の知事室にいましたが、本当に県庁舎が倒れてしまうのではないかと思うほどの大きな揺れを感じました。鳥取県庁をご存じない方が殆どだろうと思いますが、私の知事室は 3 階の一番はずれにあります。建築の専門家に言わせると知事室が一番危ないところだそうです。なぜならば知事室の下は全部空洞で、1 階のロビーみたいなどころの上がすぐ知事室になっており、2 階が抜けているものですから、構造物が何もなく柱だけなので一番危ないところで、したがって一番よく揺れたと後で聞かされましたが、とにかく本当に恐怖感を感じるほどの揺れを覚えました。震源地は県庁から西にだいたい 110 キロくらい離れたところにあるので、震源地はさぞかしだったろうと後で思いました。

その時、私は何を考えたかと言いますと、2 つ考えました。1 つは、ああ、とうとう来てしまったか、やっぱり来たかとすぐに思いました。なぜそんなことを思ったのかは後でお話しますが、とにかくその時は来てしまったかと感じました。もう 1 つは、その時に、これはきっと鳥取県で震源地は西の方だろうと。何の理由もなく、何の客観的な判断の材料もないですが、とっさにこれは米子の方面だろうなど。米子は鳥取県でも一番西の方にあります。県庁のある鳥取市が一番東で、兵庫県に近い方にありますが、その時にきっと米子の方だろうなと思いました。まったくのあてずっぽうですが、でもそれも結果的に当たっていました。なぜ当てることのできたのかも後でお話しますが、その 2 つを思いました。すぐに災害対策本部を作らなければいけないということで、それから作業に入ったわけです。

先ほど司会の方からご紹介いただきましたが、私は平成11年4月の統一地方選挙に立候補をして、生まれて初めて選挙というものに挑んだわけです。いろいろな事情があって選挙に出ることになりましたが、選挙に出る、すなわち鳥取県という地方団体の長を目指そうというからにはやはり自分なりに是非やってみたいことを真剣に考えました。もちろん多くの人から出ると言われて引っ張り出されたのが現実でしたが、しかし実際に自分で出ようと決断した以降は自分の問題になりますから、自治体の首長、県の首長を目指すからには本当に真剣にごれとこれとこれはやらなければいけないということを考えました。

いくつか考えましたが、例えば1つは今の我が国の行政はどうも透明性に欠けている。最近の例えば外務省の不祥事、とんでもない事件があるわけです。政府はいま地方団体に対して地方分権でもっとしっかりしろと。市町村は今の市町村の規模は小さい。もっと大きくなって実力を蓄えなければ国は権限を委譲できない。だから合併でもして、もっとシャンとしなさいということを政府は考えているし、言うわけです。しかし、我々から見ると、それはたしかにそうかもしれません。政府に比べたら都道府県だって市町村だって規模は小さい。けれども、あんな外務省のような変な金の使い方をするところはたぶんどこにもないはず。少なくとも私の鳥取県にはありません。競馬馬を買ったり、愛人の生活費に公金を回したり、あんなのはないです。ちょっと政府の方にもっとしっかりしてもらいたいと思っています。話が横道にそれましたが、とにかく透明性を確保していないから、あんなことになるんです。情報をちゃんと公開していれば、あんなことは起こりっこありません。情報を公開しないで秘密の中でグチグチやっているから、あんなことが起こってくるわけです。

ですから私は選挙に出ようと思った当時、とにかく日本のこれからの行政は透明性を確保する必要がある。というのはそれまで私も政府の一員であって、そのことを痛感していました。ですから、鳥取県でこれから行政をやっていく上では必ず情報公開をしようということで、情報公開は絶対いたしますということを大きな公約の1つに掲げました。

もう1つは鳥取県は東京や大阪や横浜のように人口が非常に多くて産業が活発なわけではありません。どうしても元気がない面がありますから、これは仕方がないですが、元気でにぎやかにしたい。

いろいろな意味で、農業も含めて産業も振興したいし、先端産業もリッチにさせたいし、情報通信の基盤整備もしたいし、そんなこともひっくるめて元気にしたいということを1つ公約にしました。

3つ目が実は防災でした。平成7年に阪神淡路の大震災を見ていまして、あの頃兵庫県がというわけではなく、日本どこでもそうだったと思いますが、危機管理がきちんとできていなかった。危機管理の意識もなかった。したがって体制もない。そういうところにある日突然阪神淡路の大震災が起きて、これは地元の地方団体も政府もオロオロシオタオタして対応を誤ったこと。当事者の皆さんには大変申し訳ないかもしれないけれど、しかしどうみてもそうだろうと思います。もっと準備をしていれば被害を少しは小さくすることができたかもしれない。政府も地方団体も、どこもそうです。兵庫県だけではありません。どこでもそうですが、準備を怠っていたためにいたずらに被害が大きくなってしまった。生じさせなくてもいい被害を生んでしまったことは、大変失礼かもしれないけれども言えると思います。

そんなことを私も見ていましたから、私が自治体の首長を目指そうというのであれば、絶対にそういうようなことだけはしたくないと真剣に思いました。もちろん災害ですから被害を皆無にするとか、そもそも被害がまったく出ないですむとか、災害が起こらないようにすることは無理な話です。天変地異は必ずあるわけです。

から。けれどもその被害を最小限に食い止める。不必要な被害を生じさせない。これは自治体の責務だろうと私は思います。ですから、選挙に出ようと思う時に鳥取県はこれから防災安全の地域づくりを心がけますと公約の1つに掲げました。この3つを言って、実は立候補の表明にしました。

ところが正直言って、最初の2つはいいです。情報公開と言って、みんなそうだと行って応援してくれますし、それから鳥取県をこれから元気にぎやかにしようと言うと、それは是非そうして下さい、子供の就職先もなく困っているからどうかやって下さいとみんな支援してくれました。安全防災の地域づくりなんて言う、誰も関心がないです。選挙をやってみてわかりました。そんなことを考えているのは役所だけで、選挙の準備のためにいろいろな話をしても安全防災と言っても殆ど誰も関心がないです。これが世の申の実態だということがよくわかりました。

わかりましたが、実際に当選してみて本当に必要なことですから、選挙の際にはあまり公約として打ち出しても大した反応もなかったのですが、でも大事なことですから、これは着々と公約通りやりました。私が当選したのは平成11年4月です。その頃、鳥取県の防災の組織は消防防災課があります。

皆さん方のところもそうだと思います。消防防災課がほしい総務部にあります。鳥取県の場合は生活環境部にありました。その中に防災係という係が1つあります。通常の火災、火事、救急は市町村の仕事ですから別にして、これがいわば県のレベルでの防災の責任者、そのことを専門でやっている職員で一番の責任者は鳥取県の場合は生活環境部消防防災課防災係長さんです。これではいかにも貧弱なわけです。防災という地域の根幹、地域の安全を守るという大変重要な仕事の担当が一係長さんだというのは、やはり組織としては脆弱だと言われても仕方がないと思います。思いますが、これは鳥取県だけがそうだったわけではなく、全国的にそうでした。今でもそういう県がたぶんあるのではないかと思います。私はそれではいけないと思いました。

防災というのは本当に起こってからでもそうですが、起こる前が大切ですから、その時に訓練も含めていろいろな準備をする。それは全庁的な仕事なわけです。ですから、本来はトップが率先して自らリードしていくことが必要だと思います。私もそれを心がけました。でもだからといって知事が毎日防災のことばかりやっているわけにもいきません。いろいろな仕事がありますから、防災も重要な仕事だけれど、それだけやっていけばいいというものではありませんから。さすれば防災というものを私と共に、ないしは私に代わってやってくれる、かなりクラスの高い職員が必要になってくるわけです。私はさっそく防災監という、これは兵庫県に防災監という職を作っておられたので、その職をただちに作って任命をしました。これが当選してから3ヶ月後の平成11年7月の人事異動で、防災監という部長次長級のものを作りました。その下に防災系の組織を充実して強化をしました。そこから始めることにしたわけです。

まずやってもらったことは点検です。その時の鳥取県の防災体制はどうなっているのだろうかということを出発点として点検してみました。いろいろな問題点が出てきました。問題点が出てきたと言うよりも、問題だらけだったわけです。これを一つひとつ改善していこうではないかと、私は防災監と相談をして、そこから作業を始めていったわけです。いろいろな検討を加えて、そしてこれからの方向性を決めるのに何ヶ月かかかりました。7月に防災監を任命して、3~4ヶ月くらい点検にかかりました。手始めに明けて12年の1月に県内の防災関係機関と意見交換会をやることにしました。1月17日、この日は阪神淡路の大震災があった日なものですから、象

徹的な日だから、これからの鳥取県の地域の防災安全を考えるにはふさわしい。そう言うのと兵庫県の方に怒られるかもしれないけれど、記念になる日だからこの日にやろうというので、県内の自衛隊の機関、陸上と航空自衛隊、海上保安庁、当時の建設省、気象台、消防、警察、他にもありますが、そういう防災や地域の安全に関与している関係の深い機関に集まっていたらいい、意見交換会にしました。その目的は、実は県も防災をやっているし、市町村の消防もある、警察もある。これくらいは常に顔見知りになる機会が多いです。しかし、自衛隊の皆さん、国土交通省、気象台や海上保安庁など、そういうところと普段から顔なじみになって何でも相談できるとか、お互いが相手のことをよく知っているとか、そういう関係になっているかというところと全然そうになっていなかったわけです。恐らくは災害があって、さあ大変だ、自衛隊にものを頼まなくては行けない。そうなった時に初めて、どうもどうもと言って名刺交換をする。こういう事になりかねません。皆さん方のところはいかがでしょうか。少なくとも私が当選をして点検をした時にはそういう状態でした。それではいけない、やはり災害があった時にはすぐにもものを頼んだり頼まれたり、頼まれなくても応援の手をさしのべる、平時、通常の時からそういう関係になっていなければならない。いざという時に名刺を交換しているようでは絶対ダメです。失格です。

それで集まって、お互いがどういう機能を持っているのかということからやりました。例えば県はこんな体制で、こんなことができます。消防機関はこんなことができます。警察もそうです。こんな資機材を持っています。自衛隊の皆さんも全部発表紹介してもらいました。その時に非常に印象に残ったことは、陸上自衛隊の皆さんが、自分のところにはお風呂のセットがあります。入浴設備があります。ポーッと思いました。考えたら当たり前です。自衛隊にはいざとなった時には野戦がありますから、旅館やホテルに泊まるわけにはいかないので、自分で陣を張って、そこでお風呂に入る。考えてみたら当たり前です。でも、ちゃんとお風呂を持っていますというから、そうなのかなと。それから、食糧を供給する施設もあります。それは温かいご飯を炊飯しながら現地に行く、コンクリートミキサー車のようなものです。お米を入れて炊飯しながら現地に行く。現地に行った時には温かいホカホカのご飯になっているという設備もあります。これも考えたら当たり前です。自衛隊はいざという時には外でご飯を食べなければいけないわけですから。そんなものがあるんですかと行って、その時に非常に印象深かったことを覚えています。

その時には当時の内閣の危機管理室からも1人来てもらって、政府の方針も全部話してもらいました。そうやって県も含めて関係の機関がみんな防災に対して意識を持とう。それからいざという時にはお互いがパッと連絡プレーがとれるように準備をしておこう、普段から顔なじみになっておこうということをやったわけです。

これが後から振り返ると本当によかったです。それから9ヶ月後に実際に地震がありましたが、その時に振り返って本当にあの時に県内の防災関係機関が集まっていたよかったですというのが私の印象です。私も実は参加していたものですから。

次にやったことは防災訓練ですが、通常の防災訓練は鳥取県でもやっていました。毎年同じようなやり方でマニュアルに従ってやります。全然それは身につかない。そこで昨年やったことは、まず最初に県庁に災害対策本部ができたとした場合を想定してみんな集まりました。私も関係部長も消防も集まりました。そこで防災計画の点検をやりながら訓練をしました。地域防災計画があります。全国どこでもあるはずですが。市町村

にもあります。その中に地震編もあります。その地震編を見ながら地震が起こったと想定して、さて我々は何をしなければいけないかということをも自分たちで点検してみたわけです。だいたい、地域防災計画があつて、地震編もあつて、よくできている。これであちの県は大丈夫です、マニュアルがきちんとできていますとみんな思っているんですね。私もそう思っていました。立派な地域防災計画があります。ですが、点検してみたらあまり役に立たないことがよくわかりました。それをやったのが昨年5月でした。一定の被害想定のもとに訓練をやりますが、地震が起こった時にこんな分厚い本を読めるはずがありません。こんなものを読んでいたら日が暮れます。

まず、それだけでも役に立たないです。もちろん目次があつて見出しでもつけていけば、地震があつた時に該当のところはパッと開くでしょうが、その時に初めて見るようではダメです。したがって、こんな地域防災計画は実践面ではまったく役に立ちません。そのことが訓練してみてもよくわかりました。

今日お集まりの皆さんは防災の担当者の方も多いでしょうから、そういう方は普段それがバイブルみたいなものなのでしょうから、自分の担当のところ、自分に関係するところはページが黒くなるほど読んでおられるでしょう。それはそれでいいですが、実際に災害が起こった時には中枢部の人たちがどれだけ把握しているかということが重要になるわけです。県で言えば知事、副知事、部長です。そんな人は普段は殆ど読んでいませんから、いざという時に初めてページを開いたりするようではダメです。それが1つ。

もう1つはその時に実際に開いて見ましたが、これがまた内容が役に立ちません。例えば私自身のことを考えると、災害対策本部ができる私は本部長になります。非常に大きい災害では自衛隊に災害出動要請をすることになります。昨年の地震の時もしましたが、阪神淡路の時は災害要請をした、しないと言ひ争いになっていました。兵庫県はしたとか、国はいやそんなことは受けていないとか言つて、お互いに責任のなすりあいみたいなことをやっていたんですが、災害対策基本法によると大きな災害の場合には自衛隊に災害出動を要請することができるときちゃんと書いてあります。ですから、当然、大きな時はした方がいい、すべきだと思います。

それで私は昨年5月に点検をしてみました。自分自身が責任者として自衛隊に災害出動要請をしなければいけませんから、その時に点検してみたら仕方がわからないんです。どうやってすればいいのか。マニュアルを見たら、災害の規模が大きい時には知事は自衛隊に災害出動を要請すると書いてあつて、それだけです。いったいこの誰にすればいいのか。周りの人に聞いてもよくわからない。そんな防災計画では何の役にも立たないです。その時に点検をして、どこにしたらいいのか、すぐに調べました。自衛隊の人に聞いたら、どこでもいいですと。例えば市ヶ谷の防衛庁でもいいし、鳥取県には米子市に陸上自衛隊の駐屯地もあります。第8普通科連隊がおられます、そこでもいい。それから、やはり米子市で境港市との境界のところに航空自衛隊もあります。美保基地です。そこでもいい。各県には自衛隊の地方連絡部、地連もあるので、そこでもいい。どこでもいいですからということで、それならいいや、それなら私のマニュアルには少なくとも電話番号を書いて、そこの責任者の名前を書いておいてくれ。私にとって、自衛隊との関係の分野でいえばマニュアルはこれだけでいいのです。

こんな分厚い本があつて縷々いろいろなことが書いてあつても何の役にも立たない。私にとって必要なのは電話番号と責任者の名前、これがあれば私は自分でできます。ですから、その点検をした結果、私についてのマニュアルはそれに変えてくれということにしました。

それから、どんどんマニュアルを点検していくと、例えば食糧供給計画があります。災害があると、住民の一時避難所ができます。例えば中学校の体育館や、いろいろなところに作ります。昨年 10 月の地震でも随分たくさん避難所を作りました。避難所を作ると食事を用意しなければいけない。みんな家から追い出されるわけですから、炊事もできない。だいたいその近辺の食事を提供するようなところは壊れていますし、よしんば健在に残っていたとしても、あんな大勢の食糧をそういう店で供給することは不可能です。したがって、これは行政が避難場所に対して食糧を供給しましょうと地域防災計画にはきちんと書いてあります。鳥取県の地域防災計画にも書いてありました。ところが、その内容を私は見て目を疑いました。食糧供給計画の中に避難所ができると県は食糧を供給する。県は農林水産省の鳥取食糧事務所に対して精米を請求する。それを供給すると書いてあります。精米は糠を取る前のお米です。精米で保管しておいて、お米屋さんが糠を取って白米にして売るのでしょいか。

そういうものを県が確保して、計画によるとそれを避難所に送ります。白米を避難所に持って行ってどうするのか。避難場所は昨年の地震でもそうですが水道が止まります。電気もガスも止まります。

実際止まりました。水道が止まって、電気が止まって、ガスも止まって、そこにお米を送ってどうしますか。送られた方はネズミみたいにかじるわけにもいかないし、昔なら飯ごう炊さんをやりましたので飯ごうくらいあったかもしれませんが、今は家に飯ごうなんてないでしょう。飯ごう炊さんでピクニックでもあるまいし。県がいくら食糧を供給しても、お米を供給しても役に立たないわけです。

ところが、その時までの地域防災計画にはきちんとそれが書いてあります。それがきちんと政府の承認を得ているわけです。政府が承認しても現場で役に立たない。もうびっくりしまして、それもすぐに変えよう。どうすれば一番いいか。それは今日のような世の中ですから、何も精米を農林水産省からもらって送らなくても仕出し屋さんや弁当業者の皆さんがあるわけですから、そこで作ってもらって完成品にして送るのが一番いいわけです。もちろん被災地のお弁当屋さん、仕出業者の皆さんは被害によって潰れているかもしれませんが、けれど、県内の他のところには健在のところもあるだろうし、県下一円が全部壊れたのなら、よその県から頼んでもいい。そのように切り替えようということで、弁当・仕出業の協同組合の皆さんと相談をして、とにかく地震で避難所ができて食糧をそこに供給しなければいけないことになったら、業界の方でよく案配してもらって、潰れていない健在な業者の皆さんで優先的に作ってもらって、そして、それを現地に送る。送り方はいろいろありますが、そういうことに切り替えました。

実際に半年後に地震があったものですから、うまく機能して、最初の日から全部お弁当を供給することができました。もしあれを昨年 5 月に点検していなかったら、役所は真面目ですからマニュアルどおりにやります。食糧供給計画は県で言えば農林水産部の所管です。なぜならば農林水産省からお米をもらわなければいけないですから。戦後すぐの時のような発想なんです。ですから、農林水産部の職員はそのマニュアルをきちんと覚えていますから、たぶん昨年点検していなかったら地震の時にはマニュアルどおり農林水産省からお米をもらって精米を送り届けて、ずれているねと言われて、たぶんその辺りから改善はされたでしょうけれど、いずれにしてもそんな事態が起こっていたのではないかと思います。

やってみたら他にもいろいろあります。いちいち言い出したらきりがありませんから言いませんが、いま例を申し上げましたが、実は鳥取県の場合はそういう地域防災計画になっていました。皆さん方のところはどうか

わかりませんが。なぜそうなっているのかと言うと、地域防災計画は本来はいざという時に役に立つものとして作られるべきものです。ところが現実はどうかと言うと、国が災害対策基本法を決めて、当時で言えば自治省消防庁があって地方団体に対して連絡をして、きちんと地域防災計画を作りなさい、国が承認してあげますというところから始まります。したがって国の方を向いて、国に送って、国にお届けして、そして承認をもらうために作っている。自分たちが現場でいざという時に使うために作っていません。だから、そういうちぐはぐなことが平気で起こっています。現場主義ができていません。今一度、現場主義で現場で本当に作動・ワークするだろうかというところから点検しなければいけない。それを実は鳥取県は昨年点検をしていたものから大変助かりました。

だんだんとそれを点検していき、例えばいろいろな業界とも協力しなければいけない。先ほどの弁当・仕出業もそうです。神戸の地震の時にビニールシートがたくさん必要でした。地震で屋根の瓦がずれるので、雨が降ると家の中に染みこんでしまう。だから雨が降ってくる前にビニールシートを張らなければいけない。ビニールシートをどうするか。これはかさばるので保管するのも大変です。鳥取県ではどうしたかと言うと、ホームセンターのようなお店、しかも県内だけに店舗を持っているお店ではなく、県外にチェーン店を持っているところと提携をして、鳥取県で災害があった場合は鳥取県にビニールシートを持ち込んでもらう。県内のは店舗からすぐなくなります。チェーン店は県外に店舗を持っているので、岡山や広島から供給してくれる。そういう提携をしました。これも昨年の地震の際には非常に効果を発揮しました。しかも、そういう業界の人と提携する時には我々もよく考えて、便乗値上げで値上がりしかねませんから、ビニールシートを供給する価格は地震の発生する前の日の値段でお願いしますと提携していました。昨年の地震ではそれも全部うまく作動しました。

一部、兵庫県から運んできていただきました。兵庫県は備蓄されていましてから。そういう有り難いこともありましたが、ただ他のものは全部チェーン店から供給を受けました。

建設業界とも相談をして、いざという時には資機材と技術者を優先的にこちらに振り向けてもらえるようにできないか。もちろん建設業協会の人たちは皆さんそれぞれのところで仕事をしていますが、いざ地震があった時にはそういうところの仕事を少しストップさせて、資機材と人員を被災地に振り向けてもらう協定も結ぶ準備をしていました。その協定を調印する予定にしていたのが10月6日の午後1時30分でした。そろそろ協定の調印式をしますかと言っている頃にグラッと来て、実はその建設業協会との調印式はだいたい事前の準備の最後の仕上りの作業でしたが、それを待っているかのようにグラッと来まして非常に印象的でした。そうしてマニュアルの点検をしていたことが大変有り難かったことです。

もう1つは訓練です。先ほども少し触れましたが、訓練はどこでもやっていますが、だいたい形骸化しています。鳥取県もその例に漏れませんでした。年中行事のようになっているわけです。9月1日の防災訓練というと、ああしてこうしてと全部決まっていて、全然臨場感がありません。例えばこれは地震の訓練ではありませんが、県の土木部が中心になって水防訓練もやります。水防訓練の時に知事から自衛隊に災害出動を要請するシーンがマニュアルの中にあります。どんなのかと思って最初にやってみたら、要請状を作り筒に入れて自衛隊に手渡す、そういう儀式をやります。卒業証書を入れるような筒の中に災害出動要請書を作り巻いて入れて、水防訓練の日に「ただいまから片山鳥取県知事から自衛隊の何々さんに災害出動を要請します」と言って、

自衛隊の人が来て筒を渡すという。

こんなことをしています。電話もない時代の訓練の仕方がいまだに続いています。皆さんのところはそんなことはないと思いますが、鳥取県ではそういうことがありました。

ですから、そういう形骸化した訓練をいくらやっても意味がないから、実りの多い本当にみんなが自分の役に立つ訓練にしようではないかというので、昨年7月末に地震の防災訓練を米子でやりました。その時に自衛隊にも入ってもらい、警察に来てもらう、消防はもちろんですし、関係機関全部揃って災害訓練をやりました。その時の被害想定はマグニチュード7.2、最大震度6強ということでやりました。実際はマグニチュード7.3でした。震度は6強でしたから殆ど予測どおりの地震になってしまいましたが、違っていたのは震源地を少し間違えていまして、昨年7月の訓練の震源地は、大変失礼でしたがお隣の島根県に置いていまして、島根県の一番鳥取県に近い辺りに震源地を想定していました。実際起こったのは鳥取県が一番西で島根県に近いところですから、10キロくらいずれましたが、それでも殆ど予測した通りの地震になりました。その訓練が7月31日でしたから、実際に地震が起きたのはその2ヶ月少し後でした。

そのような地震の訓練をしていたものですから、私のところの県の幹部はみんな経験があるわけです。みんな自分のものとして昨年7月末日に訓練をしていましたから、いざという時にあまり慌てませんでした。私も10月6日に地震があった時に我々は準備は全部してきたし、同じようなところで訓練までした、だから自信を持って慌てないで、この対策に乗り出そうということが言えました。皆さん方のところも訓練はやられていると思いますが、その訓練がいざという時に現場で役に立つものかどうか、年中行事化していないか、それを確かめられたらいいと思います。鳥取県の場合は年中行事化があったものですから、それをやめて実際にある被害想定を置いてやったら、たまたま殆どぴったりになってしまいましたが、本当にやっておいてよかったと思いました。

扇国土庁長官、今は国土交通大臣ですが、10月6日に地震があって翌10月7日に来られました。その時に私が状況説明をして、その訓練の話もしました。手際がいいですねと言われるものですから、いや訓練をしていたものですからと。あの方は宝塚の出身なものですから、おもしろいんですね。

「はあ、リハーサルをされたんですか」と。リハーサルと言えりハーサルかもしれませんが、とにかくそういう事前の訓練は私は大変貴重だと思いました。実際に本当にそういうことをやっていてよかったと思いました。

いま縷々申し上げましたが、防災監という職を作って組織を強化した。それから県の防災体制を全部彼らと一緒に点検して自衛隊等との関係機関との連携も図った。実際に地域防災計画地震編が役に立つかどうかの点検もした、改善もした。それから本番さながらに訓練もした。こういうことをやっていたからよかったのですが、やっていなかったらどうだったろうかと思うと背筋が寒くなるような思いが本当にします。実際に10月6日に地震があり、ただちに災害対策本部を作りました。私は知事室には2週間くらい戻らず、ずっと災害対策本部に詰めて仕事をしました。お陰様で、そういう準備をしていたものですから災害対策本部も本当に円滑にいきました。

もちろん、やってみますと事前に準備していたことや予想していたこととは違うこともあります。

ハプニングがいくつもありました。例えば10月6日に災害対策本部を作りましたが、みんなそれで役割を

持ちます。市町村への物資の支援や自衛隊との連携市町村との連絡など、全部役割分担を持ちますが、抜けているところもあります。何が抜けていたかと言うと、災害対策本部を切り盛りする人が誰もいませんでした。例えば災害対策本部に自衛隊の方が来られたりするとイスを出す人もいなければお茶を出す人もいない。そういうことはマニュアルにはありません。夜になって誰も弁当を注文していなかった、注文する係がなかったことがあります。私がやりました。お客さんが来たらイスを出したりしました。そういうのは誰も係がないから、みんなそれぞれ忙しく仕事をしていますから、最初の頃は仕方がないから私がやったりしましたが、そういうハプニングがありました。しかし先ほど言ったような準備をずっとしていたものですから、総じて円滑にいきました。

災害対策本部を作り、最初に同時にやったことはヘリコプターを飛ばして、火事はないだろうかと探しました。神戸の時のあの恐怖が非常に強い印象としてあったものですから、今回の地震できっと火災はあるだろうと思い、日中でしたからヘリコプターを飛ばして上空から火事の様子を見ました。

幸いにしてありませんでした。煙が出ているところはありましたが、すぐそれは事なきを得ました。

したがって火事はないということは1つの大きな安心材料でした。

それから有り難かったことは、火事のなかったことと関係しますが、死者が1人も出なかったことです。これは奇跡に近いことだと今でも思っています。というのは大勢の人が亡くなってもいいような状況は随所がありました。いろいろなことを後で報告を聞きますが、そこで何人死んでいてもおかしくないことはたくさんありましたが、すべてが幸運でラッキーで、それは確率で言うとゼロに近いほどの確率で死者はゼロでした。例えば大きな岩が崖の上からいっばい落ちてきたところがありました。こんなに大きな岩がボンボン落ちてきていて、自動車はペッションコになっています。それでも中にいる人は生きていました。足を大げがしましたが、おじいさんとおばあさんが中にいまして、ボンネットも潰れて、自動車の後ろもペッションコになっている。運転席もペッションコになっている。けれど不思議に2人がいるボディは少しひしゃげただけでペッションコにはなっていなかった。足はグチャグチャになっていましたが、もう30センチでもどちらかに石か車がよっていたら、完全に即死です。土砂崩れで生き埋めになった人もいます。これも本当に偶然というか、奇跡的に助かりました。

大きな屋根がドーンと落ちたけれど、たまたまいなかった。けれど、これが10分ずれていたら満員だったとか。そんなことがたくさんあります。

私は本当にこの偶然には感謝しました。死者がないというのは災害対策をしていて本当に有り難いです。死者があると気が滅入ります。葬式もしなければいけないし、慰霊祭もしなければいけない。

安置所に行ってお参りもしなければいけない。それが嫌だというわけではないですが、気が滅入ります。追悼文も書かなければいけないし。死者がいないと、そういうことがない上に明るく仕事ができます。冗談も言えます。

災害対策本部を作って市町村からどんどん被害の報告も来ますし、それだけでなく支援物資の要請が来ます。あれ下さい、これ下さいと。当たり前ですが、現地はてんやわんやですから。そうすると最初は職員もわかりましたとすぐ調達しますが、夜が更けて夜中になってくると、だんだん県職員の方もイライラしてきます。夜になってストーブ何十台ありませんかと来ます。いいけれども、なぜそんなものを夕方までに言ってくれな

いんですかと、つい愚痴のひとつも言いたくなる。夕方までなら鳥取市は無傷ですから電気屋さんやデパートで買うことができますから、それで運ばばいいですが、夜 10 時、11 時になってストーブと言われても困ってしまうんですね。つい、なぜもっと早く言ってくれないんですかと行ってイライラしてくる職員も出てくる。その時もストーブくらいじゃないか、みんなで探しなさいと。これが夜中になって棺桶 100 個と言われてたらどうしますかというような冗談も、人が死んでいないからこそ言えるんですね。そんな冗談も不謹慎ですが言いながら、明るく災害対策、応急対策をしました。

廻りますが、いろいろなことがありました。災害対策本部を作って上空からヘリコプターで見て火事はないとわかったと言いましたが、被害はもうすごいです。あっちこっちで土砂崩れ、崖崩れ、橋は壊れている、家は潰れている、これは大変だと。その時はまだ死者がいるかどうかわかりませんでした、これは直ちに災害出動要請をしなければいけないと思って準備をしていましたが、その時に自衛隊の人が私のところに来てくれました。普段顔なじみの地連の部長さんが来てくれました。それはいいのですが、日中なのにジャージ姿でひげ面で、一見するととても自衛隊の地連部長とは思えない。うちの職員もどこの人が来たのだろうかと不審な顔をして見ているわけです。私はちょっと見たら地連の部長だとわかったものですから、どうぞとイスを出したりしましたが、その人はイスに座らないんです。律儀な人だなと思って、いいですよ、イスに座ってくださいよと 3 回進めるけれど座らないんです。おかしいなと思って、何か気に入らないことでもあるのかなと思ったら、「実は知事さん、私は病院から抜け出たところです。痔の手術をしたばかりなんです」と言って、来られたんです。

痔の手術をした直後だから座ることはできませんから、どうしたかというと床に寝そべりました。気の毒だから職員に命じて座布団を 4 枚くらい持ってきてもらって、私の横に寝そべって、そこから携帯電話で情報収集をしてくれた。いま陸上自衛隊の第八普通科連隊は富士の演習場について米子市にいないとか、そういうことも全部その人が情報を調べて、私に教えてくれました。それなら災害出動要請をする時も注意しながら要請しないと、大規模な部隊を出してくれと要請してもすぐに間に合わないのと、とりあえず富士の演習場から直ちに帰ってくださいという要請もしました。翌朝 3 時には帰りますということでした。そういうことも、その自衛隊の人がやってくれて大変有り難かったです。そんなエピソードも実はあります。

もう 1 つエピソードを言うと、いま小泉内閣はいかがですか、人気はどうですかね。以前よりは支持率は少し下がっているかもしれませんが、まだ高い。その前の森内閣はボロボロでした。でも、私に関しては森さんは良かったと思います。10 月 6 日に地震があつて、自衛隊に出動要請をして、しばらくしたら官房長官から電話がありました。それですぐに森さんに代わりました。その時に「片山さん、大変だろうけれど、全力を挙げて頑張ってくれ。政府は全面的に応援する。困ったことがあったら何でも言いなさい。今晚か明日には国土庁の幹部を派遣する」という話がありました。「あなたの口から市町村長にもその旨を伝えてください」という話でした。それは現場で指揮を執っていると本当に有り難いです。本当にやってくれるかどうかわかりませんが、困って気が落ち込みそうになりかねない。落ち込みはしませんでした、そうは言ってもこれからどうなるのかと不安になります。誰も頼る人がいないですから。その時に東京からでも総理大臣がとにかく政府は全面的にバックアップをするから必要なことはやりなさい、応援しますと言ってくれれば本当に心強いんです。そういう面では森さんは頼りがいのある人だったと思います。その後も御礼に行きましたが、シャンと

しておられました。あんなにマスコミにボロクソに言われる筋合いはないと私は思いますが、それは今日のテーマではないので言いませんが、そういうことがありました。

私は総理大臣からすぐにそういうことを言われたものですから、ただちに専用回線で被災地の市町村長に自分で電話をして、それぞれ「頑張ってくれ、県と一緒に頑張らしましょう、総理からも今こういう話がありました。気を落とさないで頑張らしましょう」という話を全員にしました。やはり災害があった時には指揮官は大切です。その指揮官がグラグラするとか、自信がないとか、心配ばかりしているのでは本当の対策はできません。私は鳥取県の災害対策本部長だし、それぞれ現場に行くと市町村長さんが責任者です。その市町村長さんが肉体的にも精神的にもくず折れるようなことでは困ります。ですから、そういう電話を総理からもらって、それを市町村長さんに伝達したことは大変大きな意味があったと思います。

10月6日の翌日の7日から、私は毎日被災地に行きました。100キロ離れていますが、ヘリコプターで行けば鳥取市から25分で着きます。毎日出勤しました。朝、被災地に行き、夕方近くになって帰ってくることをしました。最初は何しに行ったかという、それは現場が大切ですから現場がどうなっているかということ、この目で見たい。職員からいろいろ報告もありますし、役場からも報告があります。県の土木事務所や農林水産部の出先機関の報告はありますが、やはり自分の目で見るのが大切です。百聞は一見に如かずです。

私は主として3つの観点で見に行きました。1つは被災地が今どうなっているのか。壊れた家や集落がどうなっているのかという、被災地の様子。2つ目は避難所がどうなっているのか。避難所がたくさんできました。その避難所でいま困っていることはないか。避難所でやはりみんな不安になります。不安になって夜寝られないとか、いろいろトラブルがあったりします。当座のことですが、やはりその人たちにとっては大きいことです。特に今回の場合は高齢者が多い地域が被災地だったものですから、高齢者の方が中心の避難所はどうなっているのか。どうい問題があるのか。これも実際にこの目で見て自分の耳で聞いてみたいということがありました。3つ目は役場がどうなっているのか。

役場が最前線です。この役場がしっかりして、住民の皆さんの保護、それから応急対策、そして復興に向けて力をいかに発揮することができるかどうか。これが大きなポイントになります。この3つを中心に私は見に行きました。

役場を見に行きますと、いろいろ問題がありました。まったく狼狽して為すすべがないところもありました。職員の皆さんはポーッと指示待ち、上から指示が来るのを待っている。町長さんは下から上がってくるのを待っている。みんなぼう然としている。その役場の状態を見て、これは応援しないといけないと思ったので、すぐ県庁の幹部を派遣しました。県庁の次長クラスとか、そういう人も多数派遣しました。役場と県庁との連絡、それから町長さんのサポート、アドバイス、そういう役柄を命じました。幹部だけでなく、マンパワーもウーマンパワーも必要ですから、当日、私は県庁の職員を300人待機させました。金曜日の夜、号令をかけて、それだけ待機させて、明日の朝からいつでもどこへでも行けるようにと指示しました。ある時は実際は200人くらいの県職員が被災地にみんな出ていきました。そんなこともやりました。

地方分権の時代には市町村が重要だと私は常に言っていますが、本当に災害の時もそうです。県庁も重要ですが、本当に現場で住民の皆さんに接触をする市町村の役割は重要です。市町村がテキパキとできるかどうか、オロオロするか。これで全然違います。やはりオロオロするところも出てきます。

そういう時は県が補完してあげなければいけない。今回もそうしました。それも実際に自分の目で見て、この役場はちょっと具合が悪いな、この役場は後押ししてあげなければダメだなと、見ていれば、そういうことがわかります。

それから被災地を見ました。行くと家がたくさん壊れています。これではいったいどうなるのかと思いました。おじいちゃん、おばあちゃんたちがぞろぞろと外へ出ているわけです。自分の家の壊れたところを呆然と見ています。私はひどい地域をずっと行きました。おばあちゃんどうですかと声をかけますと、最初は皆さん非常に明るく報告をしてくれます。「知事さん、よかった、私は命からがら助かってよかったです。タンスがスッと倒れてきたけれど、私は逃げるのができた。本当にありがたいことです」と言って、皆さん快活に教えてくれるものですから、家が壊れてもみんな元気でよかったなど思ったのはつかの間のことで、みんな話しているうちに顔がクシャクシャになって泣き出します。「家がこんな有様になって、もうどうしようもありません。建て直す元気もないし、金もない。息子が東京にいて、家が壊れたのだからこっちに来なさいよと言ってくれるけれど、今さら都会にも行きたくないし、一緒に暮らしてきた同じ仲間とこれからも暮らしたいのに、ただで家がこんな有様じゃ。」という堂々巡りになってしまいます。みんな将来に対して不安が出てきます。災害の時には不安というのがすごく大きい要素です。不安は不安を呼びます。1人の人がそういう不安を出すと、隣近所の人も「あんたが出ていくな、私もここにおっても仕方がない。息子が来いと言うから私も名古屋に行くか。」とか、そういうことになってしまいます。

私は現場に行って、この地域はこのままでは崩壊してしまうかもしれないと思いました。道路を直したり、崖崩れを止めたりはできます。関係各省に手厚い制度があります。災害があつてしばらくすると査定官なる人が来て、ここは災害認定ですと言って点検をして、それに見合う補助金の決定もあるわけです。そういう非常に手厚い制度の中で、道路を直す、橋をかけ直す、崖崩れを止める、港を直すこともできます。ところが、私が見に行った現場はそういうことはもちろんやらなければいけません、一番の問題は住宅です。こんなに高齢者が多いところで住宅が壊れてしまつて、さてどうするんだと。みんな自力ではとても再建できない。いくら道路を直してあげても、道路は立派になつても住宅が直らないから人がいなくなつてしまう。私が現場に行った時にこういうことが予想されました。一目瞭然でした。一緒に連れて行った部下もだいたい同じ感想で、「知事さん、このままだとみんな年寄りはいなくなりますね」というのが最初に被災地に赴いた時の直感でした。

そういうことで最初地震が起こつてからの数日間はそういうやり方で現場に行つては帰るということをやっていました。その時に一番大切なのは何かというと、先ほど言ったように現場に行くことです。それから方針を早く決めることです。何事をするにしてもスピード感は大切です。モタモタしていると本当に夜が ажける。私は災害対策本部にずっといて、すべてそこで即断即決しました。当面早急に必要対策に要する経費は県が持つように指示しました。そうしてあげると職員はみんな喜んでやります。そうでないと、ああでもない、こうでもない、後で財政当局にゴチャゴチャ言われると困るなということが頭にあるから、徹底的に議論をしてしまいます。そういうことをしていると、災害の時には間尺に合いませんから、とにかく即断即決でもいいから誰かがきちんと決めてあげる。これが大切です。

それから県庁の中でも縦割りの争いが出てきます。農林部がやるのか、土木部がやるのか、あの崖崩れはどちらが直すのか。グチャグチャやりだすわけです。そんなのはどこと決めてあげなければいけない。災害の

時には権限を集中して即断即決をすることが非常に必要です。スピード感です。

もう1つは情報公開が非常に重要になります。災害の時には不安が生じます。疑心が生じます。その時に私は県の災害対策本部をマスコミに対して全部オープンにしました。マスコミの人は自由に出入りできる。その後、マスコミの人は机と椅子を入れて、彼らは記事を送るし、我々は検討会をやるしで、一緒の部屋でやりました。そうすると非常に信頼感が出てきます。政策形成過程がマスコミの人に全部わかります。いま県庁は知事中心にしてこんなことを議論して、こういうことが決まったということがわかるわけです。記事も書きやすい。正確に記事を書いてくれます。普通は災害対策本部があって、別室に記者室があって、災害対策本部で決めたことを職員が走って行って記者室で発表をする。待っている方はいつもイライラしていますから、厳しい質問をしたり、意地悪な質問になって、タジタジとなって、そこでまた不信感が生じることが通常ありますが、昨年の災害対策本部は全部オープンですから、まったく垣根がありませんでした。ある人が「ここはガラス張りですね」と言ってくれたものですから、「いえ、ガラスもありません」と言いましたが、そういうやり方をしました。

情報がなるべく正確に伝わるためにオープンにすること。これが災害の時は大切です。間違った情報が伝わると、それだけで新たな不安や混乱が生じます。それがないようにするためには情報公開が必要です。そんなことをやっていました。

先ほど中途半端な話をしましたが、災害の現場に行くと、この地域を復興させるには何が重要か、それは住宅が大切だということを直感したとお話しましたが、鳥取県西部大地震の場合は住宅が一番のポイントでした。繰り返しになるかもしれませんが、今回の災害は中山間地の高齢化率の非常に高い過疎地が一番の被害を受けました。そうすると勢い被災者は高齢者になります。その人たちは家が壊れて、若ければ建て直す元気もありますし、ローンも借りられます。しかし70歳を過ぎた人はローンを借りられません。気力もありません。住宅を直せないから、その人たちはそこに住み続けたいけれど住み続けることができない。どこかに逃げていくしかないということになってしまいます。そうすると、いくら道路をなおしても、なんとなくむなしくなってしまう。この被災地を本当の意味で復興させる、立て直すのは住宅がポイントだろうと思ったわけです。

私は直ちに部下職員に住宅再建の支援制度を探すよう指示しました。きっとあるはずだからとその時思っていたからです。このおじいちゃん、おばあちゃんたちが住宅を自力で再建しようとするのを後押しする制度を見つけようとしたわけです。そうしたら職員がそんなものはありませんと言いました。唯一あるのは住宅金融公庫のお金を借りた場合の利子補給ですというわけです。しかし、それは借りられた人だけしか適用がない。そもそも借りられない人はいくら住宅金融公庫の利子補給がありますよと言っても関係ないわけです。そうすると、我が国には災害が起こった時に住宅という問題に対してはなんら手だてがないということになります。そんなことはないはずだから兵庫県に聞いてごらんください。きっとやっているはずだからと、兵庫県に聞かせたら、やっぱりありませんという答えでした。

そこで、国に制度がなくてもいいから県が単独でやろうと考えました。県が後押しをしようということで後押し策を直ちにまとめました。現地で住宅を建て直す人、鳥取県で被害を受けて大阪の息子のところに行って息子の家の隣に離れを建てる人は関係ないですが、自分で元いた市町村に建て直す人を支援二しよう。多くの家は直せば住めるわけですから、修繕をする人にも支援をしようという政策をまとめました。それをやろうと

いうことにして検討をしていたら、中央政府に何かのことで伝わりました。というのは職員が支援制度はありますかと聞いたりしますから。「ありませんよ。鳥取県は何か考えていますか」「いや、実はこういうことを考えています」という話は伝わります。そうしたら中央政府は絶対にそんなことをしてはダメだと言うんです。

私宛に山のようにファックスが来ました。嫌がらせかと思いましたが、そうではなく真面目な、住宅再建に支援をしてはまかりならんという理屈づけが来ました。忙しいから読みませんでしたが。

住宅は個人の財産で、個人の財産の形成に税金を使うことはまかりならんというのがその理屈です。

それはそうです。税金はパブリックなものですから、パブリックなものに使いましょうということで皆さんから税金をもらっているわけです。その税金を個人の資産形成に投じることは一般論としては良くないことだと私も思います。税金はパブリックなもの。道路はみんなが通るからパブリック、だから道路に費やす。崖崩れを直す、これも公共の安全を確保するものだからパブリック、だからいいわけです。けれど、おじいちゃん、おばあちゃんが家を建て直す、修繕する、それにお金をあげることは個人の資産形成につながるからダメですというのは、正しいことだと思います。

と思いますが、じゃ財政のルールを守ってパブリックなものには使って道路を直す、だけどプライベートなものには使えないから住宅再建は手助けできないことになったら、被災地は崩壊してしまいます。

住む家がないから、いなくなってしまう。じゃ道路に費やしたお金はいったいどうなるのか、無駄になってしまいます。けれども、政府は頑なまでに絶対ダメだと言います。仕方がないから、私は10月16日に上京して説明に行きました。これはやらざるを得ないからやりますよと。補助金をくれとも言わないからいいじゃないかと。こっちでやるのだから。決して鳥取県の台所は裕福ではないけれど、ほおっておくと地域が崩壊する。そうさせないためにやるのですからと言いますが、絶対ダメだと政府の人は言います。「憲法違反ですよ、そんなことをしたら。」と言われるものですから「憲法の第何条に書いてあるのか、そんなことが。」と私は反論しました。私も憲法を勉強したことがありますが、そんなこと書いていないんです。政府の人は思いこみで言っているだけです。

そういうことを経て、10月17日に住宅再建支援策を発表しました。建て直す人には300万円あげます。300万円では家は建たないんですけれどね。だけど気は心で300万円。それから修繕する人には150万円を限度に補助金を出してあげますということにしました。なぜ300万円かという、仮設住宅を造るのに300万円かかります。神戸の時に随分仮設住宅を造ったでしょう。これが1戸当たり300万円。土地のレンタル料や、仮設住宅は後で取り壊しますから、その取り壊しの費用なんかを入れると1戸当たりだいたい400万円かかります。仮設住宅については政府の手厚い助成があります。補助金が来ますから仮設住宅はいくらでも建てられます。

鳥取県の場合は殆ど仮設住宅は造りませんでした。やむにやまれず28戸造りました。あとは造りませんでした。なぜならば地域社会の連帯が非常に強いところなんです。ですから遠縁の人に世話になるとか、近隣の人に世話になることができます。被災の程度が少ない人のところに、しばらく身を寄せることが可能です。どうしても仕方がなくて28戸造りましたが、28戸ですみました。自然体でやっていたら、恐らく何百戸も造っています。その何百戸を造っても、たぶん政府から補助金が出ています。

だけど、あえて造りませんでした。仮設住宅は無駄ですから、400万投資をして全部壊してしまうんです。そ

んなことをするのは無駄だと思ったので、私は仮設住宅よりもむしろその金を個人の住宅再建支援に回した方が絶対に賢明だろうと思いました。壊すものにお金を使うよりは個人が一生懸命に再建をしたり、直したりして、その後もずっと住み続けようとする、そういうものにこそお金を投資すべきであって、300万、400万の金をパッパと使って後で全部壊してしまうのは無駄ではないかと思いました。仮設住宅を造らなかつたから、それに見合うものがリザーブしている。留保していることになるんですね。政府が言うように、個人の資産形成になるかもしれないけれど、その留保したことになっている個人の住宅再建や家の補修・改修のために補助金を出しても絶対に罰は当たらないのではないのでしょうかというのが、私の心の中のバランス感覚です。

もっと変なのは仮設住宅は別途に土地を確保しなければいけないことになっています。例えばある人が自分の家が壊れました。自分の家の敷地に造ってください、自分の土地ですからそこに仮設住宅を造ってくださいという、行政は別のところに土地を見つける手順がはぶけます。ところが、それはダメだと言います。個人の敷地の上に造ってはいけません。きっと個人の敷地に造ってしまうとそれを自分の物にしてしまって、後で壊すという時に壊さないでくれと言って抵抗するだろう。だから、情のうつるようなところに造ってはいけません。それはどこかにまとめて造りなさい、そうでないと補助金を出しません。これが政府の考え方です。おかしいと思いませんか。自分の土地を提供しますから造ってくださいと言ったら、よほど安上がりなわけです。それから仮設住宅かもしれないけれど、これは大事に使いたいから壊さないでください、何十年かしたら壊しますからしばらく使わせてくださいと言ったら、どうぞ使って下さい、壊す手間が省けたと思うのが常識だと思うのに、絶対に3年たったら壊さなければダメだと言って、頑なに壊してしまいます。そういう物にはどんどんお金を費やします。変な政府だなと思いました。私もかつて日本国政府の一員でしたが、おかしいと思いました。そういうおかしいのは言うことを聞くことはないのです、私どもは現場の必要性に基づいて住宅再建に支援をすることにしました。

発表した時には本当に孤独でした。政府からもみんなからも白い目で見られて、その時はまだお金はいったいどれくらいかかるかわかりませんでした。きちんと調査をしていませんから、300万円ずつどんどんあげていったら、いったいいくらお金がかかるだろうかと本当に不安でした。その日は正直なところ人生の中で精神的に一番疲れた日でした。肉体的にはそう疲れていませんでしたが、精神的には本当に疲れた日でした。財政的にも本当に大丈夫だろうか。それから現場の認定ができるだろうかということも心配でした。

でも1年たってみるとあの政策をとって良かったなと思いました。というのは、その政策を発表してから被災地のおじいちゃんおばあちゃんがみんな明るくなりました。みんなの顔が生き生きとして良くなりました。300万円じゃ家は建たないけれど、行政がそこまでしてくれるのなら私も頑張る。息子に話をしたら、「お母さん、県からお金をもらいなさい。僕が残りを継ぎ足してあげるから。」親孝行の人がたくさんいます。ですから、300万円が呼び水になって、子供さんや親戚や、いろいろな人がお金を出してくれたりして、今は家が建っています。今は計画の8割くらいが着工ないし完成しています。今どんどん建っています。少し遅いのはどうしてかという、大工さんが足りないんです。田舎のおじいちゃん、おばあちゃんですから、信頼できる大工さんに頼まなければいけない。あっちやこっちの工務店は嫌なんです。なじみの大工さんはそんなに多くありませんから、順番待ちになっています。

結果として有り難いことに人口流出は殆どありませんでした。悩んでいたおじいちゃんおばあちゃんも、

「あんたがここへ住み続けるなら私も頑張る」ということで殆ど出ていきませんでした。残念ながら皆無というわけにはいきません。やはりユ人, 2 人は出ていきましたが、でもあんなに大きい災害があったのにふるさとを捨てて息子の住んでいる大都会に行く人は殆どいませんでした。本当に有り難いことだと私は思っています。

今でもちよくちよく被災地に行きますが、皆さん表情が明るいです。孤独死や災害がもとでノイローゼになったような話は一切ありません。自殺なども、一切ありません。これも本当に有り難いことです。

私は今回の地震の体験をして、いろいろな教訓を得ました。それは災害復興は何を目指すべきなのかということ。いろいろなことがあります。例えば災害があつて地域がグチャグチャになってしまう。

そこで何をするかという時に、この際いい地域、いい街を造ろう。今までは区画整理もできていなかった。これもグチャグチャになってしまったから、この際区画整理をしようという発想についついなくなってしまいます。ですが、私はそれは間違いだと思いました。地震や災害があつたりした時に何が一番大切かという、なるべく元の姿に戻してあげる。これが一番の基本だと私は思いました。元通りにはなりません。物は壊れたりするわけで、場合によっては人が亡くなったりするわけですから、決して元通りにはなりません、でもできる限り行政の手によって、また住民の皆さんと力をあわせて元通りの姿に近い形を目指すべきだと思いました。

というのは、特に今回の場合は被災者にお年寄りが多かったものですから、その方にとっては70歳になって住居が変わるなんてことはものすごいストレスになります。これからの余生はできれば今まで通りで、今まで一緒に生活してきた家族や助け合ってきた地域の皆さんとこれからも一緒に住みたいと殆どの方がそう思っています。70歳を過ぎたお年寄りにとっては、環境の変化はよくないことですね。風景が変わるのさえよくないです。大都市に行けば風景どころではない、全部変わってしまいます。風景も人が生きていく上で大きな財産・資産です。近隣の関係もそうです。近所づきあいもそうです。自分が毎日通っているお店も生活の糧です。そういうものをなるべく残してあげる。小鳥の鳴き声や川のせせらぎもそうかもしれません。そういうものが甦ることが本当に大切なことだと思います。

ですから、今回の地震があつてグチャグチャに壊れたところが多かったのですが、この際大きい広い道路を造ろうとか、区画整理をしようとか、一切思いませんでした。とにかく元通りに近い形に直してあげる。これが一番だろうと思いました。中山間地ですから結構傾斜のあるところに段々に家が建っているところもあります。そういうところも随分壊れました。石垣が壊れて倒れた。その時にどうするか。この際そういう傾斜地からは逃げてもらおう。こっちの平地に住んだらいいじゃないかというのは都市計画や街づくりをやる人の発想です。その方が安全じゃないか。そうしましようと言う人もいました。ですが、それは本人の選択で、そうしたいと言う人がいればそうすればいいですけど、だいたいできれば石垣を直して住みたい、あそこがいいと言われます。けれど、石垣を直すにはまたお金がかかります。家を建て替えるのに300万の補助金を出すと言いましたが、そんなものでは間尺に合わない。それなら石垣を直す人にもう150万出してあげようということにして、石垣を直して住み続ける人には住み続けて下さいということにもしました。それで、やはりそういうところに住み続けておられます。それでいいと思います。

この際、百年の計で百年後の街づくりを考えて、いい街をつくらうという考え方が出てくるところもあります

すが、私はそれは復興対策としてはよくないことだと思います。100年たったら、どっちがいいことだったかわかりません。100年たったら、ここにきれいな道路をつけておいてよかったということにきつとなるでしょう。被災者ももうその頃はいませんから。しかし、災害対策は100年後のことを考えるのではなく、今ここで苦勞をしている人のこと、今ここで難儀をしている人のことを中心に考えるのが私は災害対策だと思います。皆さんがどう思われるかわかりませんが、実際に昨年地震が起きて、応急対策と復興対策の責任者としてやってきて、つくづくそう思いました。

いま目の前にいる、この困窮している被災者の皆さんにどうしてあげられるか、これが一番のポイントだろうと思います。私が行くと、みなさん本当に泣かれます。とりたてて何してくれと言われるわけでもありません。でも、「知事さん」と言って泣かれるんですね。事情を聞くと、先ほどのような話で、もう70歳になって家を建て直す元気もない、ローンも借りられない。もし自分がこの目の前のおじいちゃん・おばあちゃんだったら、どうするだろうか。私は今50歳ですから、まだローンを借りられますから、私が被災をして元気なら建て直すという気力もあります。資力もたぶんあるだろうと思います。だけど、自分がいま目の前にいる70歳を過ぎたおじいちゃんならどうなるだろうかと本当に真剣に考えました。そうしたら、きっと建て直す元気はないだろうな。その時に息子がどこにいるかわかりませんが、私は子供が6人いますが、6人の子供のうち何人かは「お父さん、来て下さい」という人がいるかもしれない。場合によってはリア王のようにみんな邪険にするかもしれないけれど、1人や2人はいるだろうから、その時はそっちの方に行かざるを得ないのかな、でも嫌だろうなど、その時に本当に思いました。それが住宅再建支援を絶対にやらなければいけないと思ったきっかけです。政府から何と言われようとも、これをやらなければいけないと思ったのは、目の前にいるおじいちゃんおばあちゃん、もし自分がその境遇なら果たしてどうするだろうか、どうしてもらいたいだろうか。そんなことを考えたからです。いろいろなお話をさせていただきましたが、とにかく今日言いたかったポイントをいくつか整理すると、1つは準備が大切。決して待ち望むわけではありませんが、日頃の準備、心構えと訓練。訓練は本当に重要です。マニュアルの点検もそうですが、準備です。それから、いざという時にはスピード感。そして誰かが責任を持ってテキパキと処理をする。グズグズしたり、ああでもないこうでもないと言って机上の空論をしたり、議論ばかりしては、災害の時はダメです。ともかくとっさに全部判断していかなければいけない。それをきちんとできる人を養成しておくことも必要です。

それから、災害の時は現場が大切です。一般的にも現場主義は大切ですが、災害の時には特に現場が大切です。現場でいま何が起こっているかということをしちんと把握する。しかも幹部が自分で把握する。そこで何をやらなければいけないかを把握して、それをスピーディに実行する。現場で本当に困窮・困惑している人の身になる、その立場にたつ。そうすれば自ずから何をやらなければいけないかがわかります。それは法律や制度とは関係ないです。いくら法律制度にかなっていても、現場のニーズに合っていないればどうにもなりません。物事は現場から始まります。現場で、その身になって考える。こういうことを私は昨年10月6日の鳥取県西部大地震で自ら災害復興の指揮を執って感じました。

今日は災害に非常に関連の深い皆さん方がお集まりの中で、私の乏しい体験をお話することができました。今後の皆さん方の職務に、また皆さん方が住んでおられる地域の安全に何某かの役に立てば、私にとっては大変大きな喜びです。ご静聴ありがとうございました。

(終了)

日時:平成 13 年 9 月 20 日(木)

於;日本消防会館:ニッショーホール